



先端的 ICT を駆使する プラットフォーム学会を目指す？

副会長 喜連川 優

筆者ぐらいの年齢になると、いわゆるトップカンファレンスと呼ばれる国際会議のステアリング委員会のメンバーになれる方も多いことと思う。参加して感心させられるのは、トップの地位に安住することなく、いかに魅力ある国際会議の場とするかということの議論に非常に多くのエネルギーを投入していることである。

論文の査読に不満を持つことは多々あることであるが、最近の国際会議査読システムでは author feed back が導入された。論文査読の bid (査読者が査読したい論文を宣言し査読論文数を調整する機能) や COI (利益相反) 解消機能も導入された。ボード論文に対する議論の流れをプログラム委員長が容易に見られるシステムも洗練化した。プログラム委員の実力が顕在化し、査読の質は ICT により格段に向上したといえる。評価尺度も自在に変更可能であり、新たなカテゴリーの創設にも寄与している。最新の ICT が駆使されたシステムは若手研究者に対して、査読という行為の本質とその重要性を理解してもらい、他人の論文を真摯に査読するトレーニングの場としても大きく資している。ポイントはこのようなシステムの進化のスピードが大変速いという点にある。多様な国際会議が利用するごとに不具合が指摘され、どんどん操作性が向上し機能が充実してゆくのは驚嘆に値する。科学技術の力を示す指標として論文の国別シェアが取り上げられることが多い。近年、中国からの論文数が急増しており、米国、ヨーロッパ諸国、我が国等の、論文シェアが大きく単調減少していることが各所で指摘されている。逆にいえば、国際会議で投稿される論文絶対数は一般に増大しており、ICT を駆使しない限り、運営は不可能とも感じる。

本会は ICT をなりわいとする学会であり、ICT を自ら駆使する先駆的な存在であるべきであろう。我が国には論文誌が電子化されていない学会もまだまだたくさんあると聞く。このような中で、本会は ICT 利活用のモデル学会としての価値観を前面に出すことが期待される。

デジタルライブラリ化の流れの中で、米国の巨大国際学会の収益構造は大きく変化している。本会の経時的変化を見られる財務解析の ICT 化は必須であろう。本会 HP へのリファラー解析も不可欠である。楽天は、長あーいページの商品がとてもよく売れるという。スマートフォンに数行にまとめた簡潔な情報を見る文化とは大きく異なる。論文のページ数はデジタル化した現在、昔に比べるとコストに過敏に影響しない。簡潔なアブストラクトは当然付与するとして、論文本体のページ数制約を緩やかにし、熱い思いをたっぷり書ける長い論文を受け付けるようにしたらどうなるか試すのも面白い。若い方々からフレッシュなアイデアを頂き、過去 2 年間しか見ないインパクトファクタとは全く異なる新しいフレームワークの実現 (game change) を、ICT を駆使してデザインすることも試みたいものである。

今日 IEEE において最大の Society は Computer Society である。半世紀を経て ICT の存在感は絶大といえる。一方 ACM は既に 50 以上の SIG (Special Interest Group, 研究専門委員会に相当) が生まれた。その急速な発展とともに該学問が細分化し、相対的に単位専門分野当りの研究者数は減り、自分の専門と少し距離がある論文の査読を割り当てられても、記載されている提案手法の評価結果の有効性を咀嚼することは容易ではない。データもプログラムも全て添付可能とし、結果をきっちり確認できる論文誌を是非作ってほしいという声も多く聞く。

若い方を招き、ワクワクする新しいアイデアを ICT を用いて短期間に実現する。ソフトウェアは可能な限り OSS 化し、他学会からの有志の参画も積極的に受け入れ正のスパイラルを支援することが大切である。学会のコンピタンスとしての競争領域を見極めることは当然必要であるが非競争領域の共有化を進め、数多くの有益かつ斬新なサービスを「プラットフォーム」として他学会に提供する。それによって、日本の学会群全体のパワーアップのお手伝いを率先してする、そのようなプラットフォーム学会を目指すのはどうだろうか？ 筆者の能力不足と紙面の制約から、本巻頭言は雑駁な内容となってしまったが、種々御批判を賜れますと幸甚である。